



六ヶ所集

5
4387



へ5
4387

へ5
4387

月日百代の過

月日百代の過
又旅人也舟は

海濱うへる遊口と名をて老もむ

くす物身日と旅もよと旅を極と

寸古くも多の旅も死勢も阿や

予母以者もよの身もあゝの津川の

帆ははかり舟も漂流はあやも

やもす海濱もよもすも志もす乃秋

昭和八年六月八日寄
五十嵐力氏贈

江上の破船ふ能乃古築をすまひ
了や年も学すまき。平家の忠よ
白川を闌こえ世とそく人の神の物よ
はまきす心ぬくふりせ乃神神のま
地り河をて取その手博りま
引は破を著く望の能付く三里
ふ空すやうらぬ松島の月火ふよ
かまき住る方の人譲り枝風

阿聖の移る番

字能戸も住習う代をひるの家
面ハ白と能若柱よりけさ能生も
末乃七日の日の忠職として月ハ
左明きて光あきよれる物この
不二能字出りて上聖谷中
若菜の権又いれ心海は能つ
きの記をを震よりけとひて舟

ふりて遠く千住と云所より船
阿のきこも舟途三千里花おもひ
抱ふふさうりて幻乃ちあまこ平
離あぬ河さきく之

新春やきき舟奥の目か泪
是頃矢立ぬ初とくりりる終
すまらん人々舟途中よ立ちこい
て後うけのみやうせりて見送るは

ことし元禄ことせよ舟奥舟を途
のり御只うりる免とおもはる立て
果てよ白髪のはらさきめりて舟
舟よ舟ききこりるめりてあたまの
葉生る舟はらさき舟の
末がうけりて日海早加と云舟よ
きこりる舟よ舟きき疲骨はらさ
舟かたの舟あきく舟舟

と此立侍所并子一ふの教の
防まゆゑ雨具墨をまねて出せぬ
はひたひたさし錢をいさへぬ
さしぬふ并捨るるを洛の奴
とまふはるゝふりるをたす

室のハ崎千一詣付同方曾らる白
以神を末れ是はわねの神也
富士一跡也毎元室よ入て焼あふ

たふ丸のな中ふ丸は出見せみと
せれあふ一室のハ崎とや又
飽く漬わち一侍のこの禰也將
古のまらりらと奠と禁を縁記
西首をよ侍ふりも侍
廿日見せしは禁より侍の侍
ふたふち一室名は侍まを侍
ふたふち一室名は侍まを侍

中傳も一夜社に於て此の事解て
体への心もいふも仁に備世に土に
示現しつゝ葉門に在る礼
しとまの人は此の事いふも
何しとまの人は此の事いふも
みしとまの人は此の事いふも
亦偏因に志也剛毅未納の仁
平近きも九の葉門に在る礼

尤も名も

卯月朔日清山に詣りて昔
此の法も二世に於て一に於て
大師開基の時日光と改めし
歳末末法は此の事いふも
一天に於て此の事いふも
よ何れも此の事いふも
里路評多して此の事いふも

何よりよき昔多分家の日の光
黒髪山を眺めりていづれか
白

判捨て黒髪山一衣更いせ

曾良の河合氏わがとあまやと
芝蕙此の美ふふたふたふた
ら葉新水色の方とままのハの
松島象浮の眺めりせんやと

収花且し羈旅の難たり
旅立曉あけに髪切判て思添ふ
はよと久あま五い改かり宗悟そうごに
仍いて黒髪山の匂におひ衣更此
ニ字じ力ちから何なにかかままいいふ

廿餘丁山頂光あかりりて流る岩洞
乃頂より流れ流る百尺手岩
と碧岩崖あきより岩麓あしより

花より入る滝の豊の川に
舟の漕ぎに舟を伝ふ也

昔の漕ぎは荒れや友の初
形は世もはたしむ人われ
古の漕ぎは荒れや友の初
中へ入る漕ぎは荒れや友の初
りし雨降日あつた農夫の家
子一報をうけて舟を又聖中

をりまこり野村若くはあり
等刈あのことよあけまよりの野夫
といふとも舟をうけて舟を
いふす入る漕ぎは荒れや友の初
はあられうめは旅人の舟
ふし漕ぎは荒れや友の初
若くは所よこる漕ぎは荒れや
舟の漕ぎは荒れや友の初

治者といひてきく。獨ハ小娘ノを
名をかしき縁とて言ふれぬ名共
かしき一うみれい

音良

如法縁とて八重ノ權子ノ名成
新て人里ふよれま何ハ心を鞍
はるよ結付てる返ハぬ

黒押と鍬代洋坊古柳ハ方
よ音行ハあひるぬ何ハこれ悦い

日お清りて其才ハ祝ハまふ
糸ハ朝夕ハ物ハふまひ自ハの家ハま
を付ハひハ親ハ属ハ社ハまハもハ取
あま日ハなハあハまハまハ日ハにハ邦ハお
千ハおハ選ハ一ハまハ大ハ込ハあハのハおハまハん
那ハ須ハのハ條ハ京ハらハちハてハ玉ハ藻ハ純
おハのハ古ハ墳ハおハふハしハれハハハ鴉ハ草ハ信
手ハ帝ハ之ハ相ハのハ的ハとハ射ハ一ハ時ハあハ一ハい

赤玉氏神公の傳へありしに
此神社より傳へ給ふ感應
と云ふ事ありしに
御本堂より傳へ

御驗光明寺と云ふ事ありしに
ありしにり若堂に傳へ

・五山より足跡を御世昔途に
南玉堂岸古のおたふ佛頂和尚

山谷法ありし

聖徳横の立よりきりぬりし尾
むすももつたにふるい

と松の炭して炭より付傳へし
いりややおつえふ其伝へしと雲岸
ちう枝と由の中りまのん共ふ
聖徳のいふ女人ありしに
寺ありしにありしに彼世より

る山をゆく所は凡そまゝに斧を
用じし松枝を以て苦草を以て
月のて今終るに十宗ありし
橋をぬきしつて山門より入
はるこの山を以ての山を以て
山より方社を以て石上西小菴岩
窟よりむきしりける妙禪師の死
関法雲法師終石堂を以てみるに

木塚の澤を以てかきく反り立
と云ふ所の山を以て柱を以て
是より教生石より打鍬を以て
与りて送る此口付の山の短冊
を以て山を以て山を以て
傳へる所の山を以て

即ち横より与りて山を以て
教生石を以て温泉の出る山を以て

石の毒まきふらほる飛す蜂
蝶のまきふらほる飛す蜂
如きまきふらほる飛す蜂
柳のまきふらほる飛す蜂
う猿のまきふらほる飛す蜂
此柳のまきふらほる飛す蜂
ゆりまきふらほる飛す蜂
一昨今日此柳のまきふらほる飛す蜂

より付くれ

田一板柱了まきはる木節
心許ふまき日くすまきはる白川
此まきはるまきはるまきはる
都のまきはるまきはる
此まきはる三開まきはる
人のまきはるまきはる
紅まきはるまきはる

於あまれ世和の泉の白妙は景乃
采色咲るひつらつらとわらふ
地ふす秋古人冠るひつらつら
と改しとみは清補の泉の
色をまきしとみ

曾良

和の泉はかたしとみ開の時
とくしとみ越りまゝとみ
川と流るたふとみ津根さく右

ふ岩塚あつと三丈とみ在昔
北地城とみし事とみ
とみ所をたつとみ今とみ
新とみつとみ川とみ
竊とみふとみ
史白河北実とみ
向とみ途のとみ
風景とみ記とみ懐とみ

新らるる〜〜〜

風味の初やおもは田植

毎いよこえ世もは事らよと語

根牙三と津と良も三半と利ぬ

此森の侍よ火地ある粟西本院

城堂のよと世といよ小僧も様い

あふ古山も〜と間〜〜〜

ものよと付たる〜河

粟といよ文字も西地本とわて

西才浄土も便ありと打巻を産

西一生杖も柱と母此本院用

あよとらや

世のひとた〜はぬ茶や軒の粟

等寺霧ら巻出出す五里斗松皮

の宿と籠も〜何はら山も路

近〜此あらもほも〜〜列此

〜〜〜〜〜

谷のうらやまは云々
と母文云々
山北端
北村の里
福島
石
山

何、里の番
昔々此山
麦
一
山
月の痛

云霧の山月 竹篠庄司の旧跡の
たの山原一里半にあり板塚の里
結聖とすくふるくあり北山と云
ふるありく古き庄司の旧跡也禁
ふ大寺にありぬ人の家ありまを
古洞にあり又かほれ古寺あり
一里の石碑をば石中より二人の
娘の志ありし先妻と女ありまを母

ありしと云ふ名の寺ありつるお
かふと積りぬぬ壱塚の石
碑を造りまありてちふ入て茶
をんへい爰より義經の太刀并茶
ら爰ありしありし什物と云

い爰より古刀は五月にかければの懺
五月朔日なり也其板板塚の
とする温泉水ありて湯み入る宿

あまの土中へ是河あてなや
其貧ぶこけもあひまゐる
里の火のけよおあをまうけて
おすおよ入て雷の雨志きりよ
降ておるよよりまの登敷りよ
よお禮て眠るまお病け入
おりて消入斗ト之短おの
やもやしり明きも又旅まぬ

将親乃余波おすこあすこ
業おおは驛よ出るおこるり
末とよまえりおる病見末を
とら下驛旅過土のり御捨身
毎常の観念道路よ志之見
天社命るよとま力御とら
路縦横り踏り伴連の大本
戸ととす院摺白石の塚と

足尾の郡に入ると藤中將美方の
の塚から九のりとも藤中將美方の
とそよりを右にみゆる山際の里
此のち足尾と云ふ祖神の
社より今の所へありと云ふ
此の五月雨よりありと云ふ
才津くれ傳れまふ所なる所
て了るよ表傳足尾の五月雨

のちよあまのり

足尾のちよあまのり
岩江のちよあまのり

武隈のちよあまのり
神根の土陰より二本よりありて昔
のちよあまのり
法師あまのり
山ありて人此木と伐て名を川

檜 松をこころえきりてりふたはき
はくや松を世に心端のまじり
詠ふの代にあらは伐たるは松
継ふとせしとすし今将子歳
の如くあらしとのわしてあし
松のけしきよるん侍

試隈社松みきやとを運綴

と云ふの儀ありと云ふ
奉白

櫻より松を二本に三月越

名を川を渡りて仙臺に入らば
婦く日や旅宿のまじりて
遠山を寸爰に盡す
阿彌陀心ありと云ふ
よちよちとの者手比き
名ととらると考り玉
一日案内を宮様邸の

あひて秋に葉をみちのこや
玉田よと世つゝ一の園はなほ
咲くも世日影母もぬねの林
入て爰に木の花とともうむ
のへはあやふくすまのこふ
三のさといふはれ葉師事天神
の法社をとおこせりいふまぬ
松高塔のまのふく盡くおて
は

且緝に漆結津けら草鞋ニ足
饒きされとも風流のこまの
爰に玉くすは実をたす

阿やめ叶足り結ん草鞋の結
この盡圓はあやまてまをり
あくの細るは山深し十首
葉も今も年々十首の葉
新酒を園ちふ献すといふ

燹碑

市川村多賀塚有

碑の石多し高十六尺餘横三尺斗
石甚或穿了文字幽也四維國
界之數里許去す此城神龜元
年按察使鎮守符將軍大野胡
臣東人之所里也天平室字六年冬
議東海東山節度使同將軍惠
美朝臣檣終造而十二月朔日と

有聖武皇帝在法時一歳あり
むくしむくふまの松おほく
語傳ふといへとも山崩川流て
たふさる石を埋て土をかし木
に老てし木をかしりれ王時移り
代爰しとす取たし加るるゆ
のし或爰し事して懸るさし案の
記念今眼あしし古人此心

さ岡をり御の一住存命也
此の薨旅の骨とわきあれて泪も
枯るもも也

井所より野田の玉川沖の名なる
如末の松山とちと造る末松山といふ
松乃河あり皆墓いふとておと
のり校とてあり契の末と終ハ
かくのしとてさき由しさま増して

塔のまの浦よ入おのりぬと中
るのま聊はあて夕月釈迦よ
籠り流しあり丘——飛舟の小舟
こまはまて有ありありよ
てうししもとみたるあらぬ
いふ名とてお目盲法師の
疑馬さなるしと奥よりと云
もはあらし平家もあらし孫

もも河くん空ふじまゝ 洞子うち
よて花ちのうらうらやうとくは
すうふさ土の遺風忘るまの
くす縁よまゝも 子胡墮る
たの神よ詣 国守再興いそん
く宮柱ふくく 九彩椽きくや
のよ石の礎九段よまゝ 朝日あ
きの玉りきくくや 守かゝるたの

果莖土の懐きて 神靈あつたよ
かりゆすくふ 吾玉の凡俗まじ
いと貴けれ 神あよ古記室燈を
この水の産ゆくの 而く文治三年和泉
三郎奇進とむる 五百年來の傳
今日乃前よりくひてく、後く
跡く 渠の勇義忠孝の士也 佳念
今よ玉くくまゝいふ事ほし

滅人の道と勅義は守る
名もまゝとてよまをふとまの日既
午よあゝ〜 松をうめて松鶴の
数其間二里餘雄鶴の破らく
掃とあゝ〜 松鶴は杖桑才
一の好風よ〜 凡河江西湖と心
東南よ海と入て江法中三里
浙江の湖頭まふ鶴〜 の数を

お〜 て歌のハ天孫指ゆすもの
ま波よ葡萄た〜 ハ二重よの
三重〜 冬〜 尤ふあれ存よつ
あゝ員〜 何り抱るあま見孫あま
〜 松の孫こま〜 枝葉
汐風よ吹〜 屈曲とのつら
ま〜 其まを貫た
〜 美人の顔と粧ふちも振

神のむくし大いすむかきる
よや造化の天工いつまは人の筆
とすむい河と魚を世

権修り候き地はくたて海よゆら
清也雲若禪師は子室乃以
坐禪石あり有將松の本陰り
寺寂いと婦人も穢く兄へ傳りて
落種松笠るるとあふりる葉乃

菴閑り住りしといふる人とまき
洲まらるる先那はくしとまき
不とよ月海よりわけて昼のみま
又阿らきむ江よゆりて岩
おれに字をひらき二社と他て
風雪の中よ旅床もあるとま
阿やまきまき妙なる心地せぬ
相崎や鶴よ牙とくれ部

書

予を口もとちて眠んとしてお
らぬに旧屋にわらうる時素堂
松崎の詩あり京安適松崎ら
志士の和奇と贈る感懐を解て
こよひの友とす且杉風濁子ら
勢匂あり

十一日瑞岩古より清南寺三十二
寺の昔志壁の平四郎出あがて

入唐帰朝の後并山す其後ふ
雲石禪師の住化に依て七堂
梵改りて金壁莊嚴光を輝
仁土成就の天伽監といふれり
彼見仁聖社寺いづくまやと云ふ
十二日平和泉と心さし阿ぬまの松
結とこの結るる中傳か人記掃
箱老菊梵と往くふ道よりと

ともわらぐ終よ路ちみきく
石の峯といふ漆よ出らぬ
とよそなをさる蓮花山海上下
見えぬ救玉の廻船入江干
つひ人衆地をたふして電の煙
立法いふさうさひの事すす
ふももまねるがと荷んとす
と更らぬ人き一樹るとい

小家一報をたうて明ぬ
又とぬるまひり神のあ
尾ちち牧場の萱りきよ
めよみそおこなる提成り
ききほよろく戸何と云ふ
一巻して平泉よ玉敷其間
余里ふと、おあゆ
三代の業耀一眩と中

大門北に於て一里あることより秀衡
の討つ田原をよみ来て金鷄山のこ
形を踏ん先言報りの日きそ
如上川南流より流る大河也
衣川と和泉の城をめぐりて言報
の下より大河より流入康衡等より
河原の衣の突を隔る南流の
は一登の夷をちきとみく多里

諸も義臣すくひより此城より
こころ功名一時の最と云う困破
きて山河あり城春より州
青みよると笠あてて時の
津より河を流し伝ぬ

五等兵と云う夢の如
仲たふし夢を分るふを
夢て耳を〜〜〜二重開張

す經堂ハ三將の像とのこし
光堂を三代と棺骸弼め三尊は
佛を安置す七室交りと事
珠の扉吼うやふれ金の柱表
石より朽く祝額廢空虛の最
と成しきと四面新し圍て蓋
を覆て風あると凌時時子歲
の記念といふれり

五月百の降のこしとや光堂
南ア道なきよこやと山石を
里より泊る小尾崎三河のふ崎を
通てるよとの 向うの尿あの間
に卯の玉の玉の讀んとす
此路旅人稀なき所なりと
開守よりやのしと漸とて
穿るとす大山とのり所と

日統と告りて、射人並家を見
しけり。舎を求む三日風あり
てよきまき山中小道留す

登風と云は尿ある地と
あり。紅雲をより出陣の玉
女を留り道行らるるは
れと及ぶる人の我れを越へ
たし。さやと云ふて人を

新傳れ、究竟の象者及認指
さよと云。橙の枝を携りて
先よまをり。心を心阿羅
知めし。あふ。き。日。茶。餅。と
辛きおしひさる。後ふり
てり。あり。の。さ。ら。い。す。高。山
木。林。こ。と。し。て。一。鳥。あ。り。ま。さ。く。す。本。の
下。園。後。り。あ。り。て。お。り。ち。り。

雲端よりちり心地一草
篠の中踏をくみとあそぶ
子蹴て机はめと地汗流
して家々の庄も出所一の
案内と一みののまやう此
必不用の月も急なうと
まらせて仕合をいふと
こころぬけはまてさく胸

之乃こ也

尾島澤よて清風とる者
ぬきを富るものるれと
うす都もおこらひて
まら旅の情をも知れと
とめて去途はいつと
をて命一伝

涼きと我をよと伝也

這出よのじやら下北じまの寺

あつともまはつ佛よ〜お粉の志

聖徳太子曾良人々古代のす〜

山形領よ立石ちと三山寺阿弥

慈覺大師の開基〜経法

閑と地也一又す〜人々

乃ま〜むらよ依て尾必澤よあり

空河〜返〜生間七里〜也

日以よ〜岩す禁の坊了宿あり

至て山上の望〜乃ほ〜岩〜

巖と重て山〜松柏手回

土石老〜苦滑よ岩上の院

扉と閑ておの音起〜岩岸と

め〜岩縁遠〜仙閑をお〜

佳景寂寞〜心す〜りの

閑とや岩よ志みの峰あり



家上川のほとり大石田と云所
日和を待爰より古き流石の境
とわれを志きぬ念乃むかしと志
とひ草角一歩のほとりとや
此のよはりのふしと新古ふし
道よちのよはりのふしと
志す人ふれとや
ふき一巻を残しぬこの多しの風は

爰ふる玉あり

家上川のみちのくより出て山形
と水とすことんをぬきと云
おろりしに難ふを板敷山の
水を待て果は酒田の海よ入た右の
手後の茂この中ふ船を下す是
ふ縮つて多しとやいふ船といぬ
白糸の滝は青葉の障しよ

仙人望岸亦臨て立水み素花
川て舟阿流う

五月五日阿らめく早〜上川

六月三日羽黒山よ中〜園司た吉
と云考を尋りて別南代会曾覚阿
園利よ得す南谷也父院り
全〜憐愍の情と云屋うよ
阿〜さらう

四日幸坊よとめて流池與新

有難也と云うわん南谷

五日權現よ請南山開瀨能除

大師い片巻の代通人と云書と

去り寸延葬式よ相お里山の神

社と有書寫黒の字と里山と云

書りや羽お黒山を中略

羽黒山と云りや出羽といふ也

鳥の毛羽と此國は真の南と
風土記の傳とやらん月山は殿
と今も三山とす當寺は江東
叡の属して天台止觀の月明
らこのは田舎融通の法の灯りけ
りひて僧坊棟ともく終験
の法を勵し靈山靈地の陰
如人貴且心繁業長

めで度は山と渭川
八日月山よのわく木綿志ん牙
よひりけ實冠の段を包強力と
云々のよるやうれや雲霧山氣
西中の氷雪が踏みのまう方
八里更く日月の乃の雲関
よ入ると何やよれ息絶者として
頂上ふ疎れと日没く月照る

異域浦篠と松としく針と
明と結日出て雲消きいふ
庭より下る

谷の傍に御法小座と云ふ此玉の
御法玉水と撥て爰に潔斎
しく紐を打終月山と銘紙切
て去り賞さる披龍泉と剣
を淬とくや干将莫耶のむしと

志ふ道小松松の執阿婆とめ
方ふふまの岩子腰の帯と
志ふふふふふと三尺とくわさ
櫻色けふふと半ひけふあかぬり
撥玉のふと押てまふとまふとめ
八通とふふふのふふふとまふと
梅泉の爰ふとわふふとふふと
僧山の奇花夜も爰ふ思ひ出て

於下々として覺る可き此山中に
微細なり者の法式として他言
事と禁す仍て筆として記す
坊より傳れしに閑閑の需に依て
三山順礼の句に短冊よお

涼きやふの三日月は洞黒山
雲の字は幾何崩る月の山
清きぬ湯屋ふぬすは後

湯屋山流ふむ乃の廻る良

好意を立て鶴々園北城の山
氏重行くと物のぬのぶる世々
ちれり沈沙一歩とある老吉も在り
送るぬ川舟よふふ酒田乃添
よ下り淵尾不玉と云は乃師の許
を篇とす

阿河の山や吹浦をなす

暑き日哉海よいまさくの宮上川
江山各陸の风光 教らるる
今象浮よ方寸と責酒田此漆
よ東北の方山を 城破る傳ひ
いささふみして 其際十里日就
やわらぬ比沙風生る砂を吹上
雨濛濛とくく 多海に山くく
周中よ莫他くく 又壽也と

きは雨後の晴も又 乾舟とて
の皆なよ 膝をいれくるの晴
成待て 朝天能霏て 朝日
やうよさく 出る程よ 象浮よ舟
うらふ 先能 周中よ 舟とよ
三年 幽石の 跡をとめく ひと
乃 岸よ 舟とありれ 玉の上く
よよき 梅の 老木 卯月法師

の記念の紙のこす江上へは陵阿
里神功后宮と御墓と云寺
と千湍珠と云此又より幸
あり一草いよこすまいつら
かよふ此ち好方丈小座
筑物を持て風景一服の中
おきて南よ鳥海天とけえ
其陰うらう江よ阿の西むや

の開洛とらたの東ふ徳と築て
秋田よりふた途よ海北よりよ
えそ浪赤の所と汐こ
江は縦横一里とらり傍松崎
よふよひて又異らり松崎の笑ふ
らぬ象浮こらむとらり森
はふ山のみとをそを地勢魂
けふややすは似ちあり

象浮や雨、お籠、跡ふの玉
汐城や鶴はまぬきく海涼

紫礼

象浮や料理やふ神祭

この玉の高人徳年

築の山や戸板をまて夕涼

山の上、眺鳩の巣をみる

波とんぬ契あつてやみさこの巢

習ふ

河田社余波日と重く北陸た

の聖子空、遙く社あまの狗といふ

まゝめて、加賀の府より百世里

と空嵐の関河とゆれ波の城後

乃地、赤竹と改く城中の

玉一婦人の笑、到る此冒九日

暑湿の芳、神祭をゆき

病あつて、竹葉志すはす

文月十六日の暮の振る似す

荒海や佐渡は横もふ天河

今日を親をす子志をん大もり

駒通しと云ふ北玉一の難ふ哉

誠てはさき付れは抱引をさ

お探さるふ一間隔て面は方

若き女の夢二人斗を起しや

手老くちあのこと結夢母交事

お清きまはれまけを越後の玉新

写と云所乃抱女成し伴勢系

まきまとして此開きおのこの送りて

阿壽は古御ふ如くす文志をめて

まふふき言傳ると志やる也白

浪のふすけし牙城をあらわ

阿さのこと結世とあはれま

て定免たふき 契日こ乃業困い

のふはつとふと打とをまへ〜
探入てあ〜を旅まふふ〜
むくまふ初来まぬ旅路の
うさ阿より見東る〜
付れを見こころぬもは信を
ひ付舞衣の上は情ふ大慈
のめををたれ〜縁縁勢きを
と泪を流は不便の〜

付ま〜と〜
ある方おほ〜只人乃〜
昔々〜神明の如漢〜
美なる〜と云捨る出つ〜
名ささる〜や〜
一かぶ〜遊めも〜
曾良〜かた〜書〜
くろ〜は〜

ぬ川頭あきりて 耶古と云浦り
出檐籠の藤流が喜るすも
初秋の衣とあへき古のときと
人ふ得れも是より五里いり
傳ひしそむうめの山陰より
登れ其あきか等々那れを世
此一扱乃有かすもの何れ
いひを法れりかの國より

己地は魚や分入折きみ海
卯のふ山くわらら谷と越え
金沢より七月中に五日に爰ふ
大坂より加ふ高人河と云者
ありれり旅籠とともし
一哭と云も此よりすたる名の
その一歩をききお人し
ふ志を此冬に早世志と云

其兄進善頭僧也

塚も動けず位あり秋の風

阿の字境にいさなりれり

秋涼も年毎にむけや血茹子

途中陰

阿の一日の難面とあまの風

小松と云所にて

志原に地名や小松吹萩

小松

此所古田の神社に詣去盛の

甲錦の如阿里往昔源氏に

属する時義朝公よりぬいを給

とややうも平士のものありん

目庇より吹返しそそ葉来うら

字のありもの金取ありもの就流

又鉄取ありもの生蓋討死の皮

末曾美件新状に添て此社

よこみれ侍り〜樋口の次郎の
仗き〜戸すまのあふ〜縁記の
美え〜とら

むさんや赤甲のふらき〜ん
山中の温泉より〜と白根
の嶽伝〜美を〜河川を
左の山際〜観音堂ありと
山の法皇三十三所の法礼

と希させぬひて〜後大並大慈の
像有安道〜ぬひて形谷と
名付りふとや那智谷組の
二字とあの方侍〜とを喜
石はま〜ふ古松揺る〜く
萱あきののふ堂 岩乃上り
造りあけや縁結の土地
石山の石あり〜秋の風

温孝了洛す其功有明了
次と云

山中や菊をききぬ湯の白
阿るすす物ハ之米之助とす
いやは不量とすれハ父誅法を
好之洛の貞室為半此むや
震了来りし比風雅と守
められ洛とゆり貞徳の門人

と土ふつろむり志ら難功家
後此一村判河の料を請ま
云今更むり語と云ふぬ
曾良ハ腹を病て伴勢乃困
長崎と云所より申如いあれを
先立す所ふ
行つてきあれ保とも萩の系
と書屋たか行もの出

曾良

残のうららこ 隻鳥はこがれ
雲うららふふらしとくし 予も又

久ふふやお付消さし 笠のたけ
大聖持の椽外 金昌寺といふ
寺ふとまら 程加賀社地じ

曾らもあらの 叔此寺ふ泊て
終宵 秋風吹やうらら 山
と残き一たの 届千里ふ同

吾の秋風吹やうらら 飛寮よふ
外も明木の 虫近し 清鐘
ありま世のうらら 鐘板鳴て 食
堂へ入るふを 残あ乃園へと
こころの早卒ふして 望心
下をまぬき 僧とも 残眼を
のえ 世のもとやうて 進来家
杉苗庭中乃 帯あられま

庭掃へ出る寺の敷柳
とわ何へぬきましりし子鞋ふ
うら半捨屋城あゝの松吉崎
の入江を舟お掉しりて河城
社松とつゆぬ

終宵鼠は波とはこまきそ
月をきられらる河城の松西片

此一首より教景おとりのもの

一辨とあゝものいふ用社指哉
まゝかとも

死回天龍寺の長老古き因
阿まをるぬ又重はの山枝
といぬものり重うぬし見遊り亭
此交まを志とひまふふと乃
風景はさすあまひはくはて
お帝をるるを他さるる

少由今就安し望みたり

おきて群引はく余波引

五十丁山よ入て永平の寺を礼

去道元禪師の法寺也邦様

手里を避てくさ山陰うは

終るあふも貴きゆへ何と

名

福井の三里斗ふ新の夕飯

志とて出るよまやうれの

洛もく愛う等裁と云

古き隠士より法れの手より

江若ふ来りて予はるも品

十とを解りていふ老まを以

てあふや将死する人より

存命の

ういふは市中ひりあふ

引入てあはれしのおふふり夕鳥
御方下のもえりりて鶯はま
あま戸ほそをかきけはてい
此うちよこふと門はねは
あまふり女の出ていはくより
あまふりあふふ心の法付あ
此あたるあことと女のあ
あま用あらま尋めくといふ
あま

水如葉あま〜と志く
物〜とあま〜と風
情を結れとや〜とあ
折れあま〜とあ
名月、法〜とあ
ま〜とあ
あ〜とあ
あ〜とあ
あ〜とあ

の丸れと比那の山より阿らま
阿比志つ北極城小をま玉江
の廿五日秋尔出平口有雪乃
関路過て湯尾味と城れ
主燧々城かく数中平平
初厚城雪市十四日社文
之れ法数この降平霜と
もとまその夜月降晴と

安妻おおもあ之あ久記よや
といしも城洛の習ひ於明夜
の陰晴まうあ加をしと阿ら
ま酒す免うれて帝いの明神
よ夜冬す仲哀天皇の御
廟也社頭神はひて松の本
の間う月のちり入まなる
社白砂霜城あふと

往昔遊新二世海上人大勢
繁起の事ありて事あら
州土石を荷ひ泥滞
加えりて糸指津東の
奈し古例今平と云は神
前と云ふ砂と云ふぬふこれと
遊りの砂持と中侍と亭主
遊むる事なる

月夜遊の事と砂上
十五日亭主の河平多々日す
雨降

名月や小園日和定ふ
十日空雲森とれか中を海の小
貝少ありんと種の演り舟
去れ海上七里あり丸屋母系
と云ふの波籠ふ竹筒を

わらふ志さめはを僕石さる舟
平とりの勢て進風舟の百小
吹若ぬ深き小川の奈新
海士社小宗干く他
起法宗寺あり爰小茶を飲
酒頭阿さるる夕くれ乃法
中さ或不堪より

寂は也浪るかちなる濱の秋

浪の冒也小貝ふ方し萩の
貞日のちきし等裁し
筆首能羅勢る寺小妹に
吾落道も此みまをさる出む
らひてこの國は伴母路ふ
まはたなをれく天垣の庄り
入し曾良も伊勢とあり
幸し金城人もち成と生勢

て如行ふふ入集前
川子荊口父子其外志
紀人の日換とぬひ言ふ
生ぬ毛のう阿ふらとく且
悦い且いといふ旅のおう
そいひやう多やまさるよ七月
六日よふれも伊勢方北近宮
おりの舞と又舟よのう

蛤の

あつた

あつた

七

此一書ハ芭蕉ハ羽奥羽乃紀行ノ書
素竜ノ筆也書ハ縦五寸五歩横四
七歩紙ノ重五十三首尾小白紙加ふ
外素竜ノ跋有_{之今畧}行成紙ノ表
紙紫乃系外題ハ筆ノ出砂也_{ハシ}多
る白地ハおくのわたり_ハ自筆ノ書
て隨身ノ物ニ遷化ノ後門人去来
許小有又出蹟ノ書門人野坡_ハ評

亦有草稿此書在文章所相遠也
今去來之本以之模字其難者也

山皆明治亦七乘教之月復寫之

和山園南堂

